

けやきコミセンは来年で開館20年!

けやきコミュニティセンター 20周年特集



2009年12月で開館20周年を迎えるけやきコミュニティセンター。1989年の開館以来、この地域のお茶の間として、多くの人に愛されてきました。

今年度の「けやきニュース」では、けやきコミセン20周年を迎えるにあたり、通年で特集を組み、けやきコミセンの20年を振り返っていきます。

第一回◆けやきの「記念誌」

今回のテーマは「記念誌」です。

けやきコミセンがこれまで発行してきた記念誌は3冊。開館5周年記念(1994年)に発行された『けやき並木につづく道』、開館10周年記念(1999年)に発行された『まちをつくる 新しい結びつき・けやきの10年』と『出会い・再発見—いいまち創る『出会いの広場』—』です。ちなみに最後の『出会い・再発見』は開館10周年の翌年となる2000年4月の発行となっています。

『けやき並木につづく道』は1994年12月16日に発行され、けやきコミュニティの前史から誕生、センター建設までの7年、そしてその後5年間の激動の時期を記している、まさに歴史を学ぶにはうってつけの本です。編集はけやき学舎。189ページにも及ぶ重厚な本で装丁も凝っています。

この「けやきニュース」の前身となる「けやきコミュニティニュース」についても詳しく記述されており、第1号が発行されたのは1982年6月。当時の名称は「中央北・大野田学区コミュニティセンター情報」でした。当初の発行部数は1300部。全戸配布のもとに、着実に地域に浸透していきました。その後、「けやきコミュニティニュース」に改称。開館時の発行部数は3000部だったそうです。(『けやき並木につづく道』P78参照)

続いて、10周年時に制作された『まちをつくる』『出会い・再発見』。前者は運営委員や協力員をはじめ、「けやき」関係者へのインタビュー集となっています。コミセン運営の秘密や、けやきやまちへの想いが存分に語られています。後者の『出会い・再発見』は10周年を記念して企画された「出会いの広場」の報告書と資料集となっています。ちなみに、ここでは「出会い」と書いて「コミュニティ」と読みます。

「出会いの広場」はコミセン利用者グループ同士や、利用者とけやきの共同企画、利用者グループによる展示会やシンポジウム「出会いの広場」を開催した1ヶ月以上にわたるイベントです。

読む人によって懐かしかったり、新鮮な気持ちになったりするでしょう。ご興味のある方はけやきコミセンの窓口にお問い合わせみてください。

もうすぐけやきは20年。この先、どんなワクワクが待っているのでしょうか。(K)



『けやき並木につづく道』



10周年で作られた2冊の記念誌

けやきコミセンは来年で開館 20 年!

けやきコミュニティセンター 20 周年特集



2009 年 12 月で開館 20 周年を迎えるけやきコミュニティセンター。1989 年の開館以来、この地域のお茶の間として、多くの人に愛されてきました。今年度の「けやきニュース」では、けやきコミセン 20 周年を迎えるにあたり、通年で特集を組み、けやきコミセンの 20 年を振り返っていきます。

第二回◆「けやきってなんだろう？」

去る 6 月 30 日、「けやきってなんだろう？」をテーマに、創立以前よりけやきコミセンに関わってこられた安藤頌子さんによる講演会が行われました。

この講演は、けやきコミセン開館 20 周年を記念した記念誌を作成するにあたり開かれたもので、多忙な中、47 人もの方が出席しました。また、講演が終わったあと、出席者による懇談会も行われ、それぞれがけやきに対する想いを語りました。



お話は、まず、けやきの生い立ち・歴史から始まりました。

例えば、コミセンにどんな部屋を作るのか、何を出来る施設にするのか、実際に形にする基礎設計、建ってからのルールや運営の仕方など、それら全てを安藤さん達自身の手で行い、文字通り「何も無い」ところからけやきを作っていくことに並々ならぬ苦労があったことを語ってくれました。また、その過程で様々な方々にお世話になったことも語り、けやきコミセンが決して自分たちだけの力で出来た訳では無いことも強調していました。

お話を通して何度も言われていたのは、今のけやきの心にも繋がってくる「よく話し合うこと」や、「相手の気持ちになって考える事」「自分達で実際にやってみる事」です。また、様々な苦難の直面する度に皆で「工夫をする、考える」ことで乗り越えてきたとも語られて

おり、そういった、これまでけやきに携わってきた方々の行動一つ一つが今のけやきに受け継がれてきていることを実感しました。

懇談会は、出席者が今回の講演内容に対してどのような感想を持ったのか、けやきに対してどのような想いを持っているかを一言ずつ喋る感想会形式で行なわれました。皆さんなりに、けやきの原点や、今を走る原動力に対する答えを得られたようで、大変実りのあるものになっているように感じました。

(レポート・加藤)



代表してお話をして頂いた安藤さん



講演のあとに行われた懇談会の様子

けやきコミセンは来年で開館 20 年！

けやきコミュニティセンター 20 周年特集



2009 年 12 月で開館 20 周年を迎えるけやきコミュニティセンター。1989 年の開館以来、この地域のお茶の間として、多くの人に愛されてきました。今年度の「けやきニュース」では、けやきコミセン 20 周年を迎えるにあたり、通年で特集を組み、けやきコミセンの 20 年を振り返っていきます。

第三回◆「けやきを運営する人たち」

今回はけやきコミュニティセンターを運営している組織「けやきコミュニティ協議会」、そして「運営委員」についてご紹介していきます。

けやきコミュニティ協議会の活動の大きな柱は 2 本あります。1 つが事業（年間行事、まちづくり活動など）、そしてもう 1 つが館の管理運営。もうです。

館の管理運営は、運営委員全員が各部の仕事を分担して行っており、以下のような仕事があります。

- 代表委員…60 人以上いる運営委員をとりまとめる組織です。代表、総務（事務局長）、財務、コミ研連、無任所などの役職があります。「代表」とはいつでも決議権はなく、議題は運営委員会でみんなで話し合っ決めてというのがけやきの方法です。
- 文書部…運営委員会だよりの作成や管理などを行います。
- 広報部…「けやきニュースやホームページの制作チーム、皆さんにニュースやチラシをお届けする配布係がいます。
- 館の管理…文字通り、館全体の運営に携わります。例えば、備品購入を担当する係や営繕係、印刷機を主に担当する係、利用者名簿係、花係、湯のみなどを洗浄する「ふきん・湯のみ洗浄」係、トイレトペーパー係…ほかにもたくさん！ 館の管理は実はとても大変です。なので、できるだけ細分化し、みんなで助け合っ管理していくようになっているのです。



けやきはたくさんの人の
支えがあっ開館しています！



住民総会で貼らだされる運営委員候補者

- 窓口担当…コミセンの窓口はいつも運営委員が入っ、接客などを行っています。その窓口のシフト表を作ったり、窓口手当を計算したり…というのがこの窓口担当です。
 - 会計…市補助成金会計、けやき特別会計など、会計業務を行います。
- けやきはこうした運営委員の毎日の管理運営に支えられて、地域の皆さんに使用されているのです。

けやきコミセンは来年で開館 20 年！

けやきコミュニティセンター 20 周年特集



2009 年 12 月で開館 20 周年を迎えるけやきコミュニティセンター。1989 年の開館以来、この地域のお茶の間として、多くの人に愛されてきました。今年度の「けやきニュース」では、けやきコミセン 20 周年を迎えるにあたり、通年で特集を組み、けやきコミセンの 20 年を振り返っていきます。

第四回◆「けやき」はどこへ向かうのか

2009 年となりました。今年はけやきコミセンにとって開館 20 周年にあたります。

しかし、この 20 年間の以前にも、けやきコミセンの開館に至るまでの様々な紆余曲折—いわゆる「前史」というものがあります。

この前史は以前の回でお伝えしたけやきの記念誌である『けやき並木につづく道』などに詳しく綴られています。けやきコミセンの設計を行った建築家・早川洋氏は 1997 年に執筆した論文にて、初めてこのまちを訪れたときのこと

を以下のように述べています。

挨拶もそこそこに私は建設されるコミュニティ・センターの計画についての夢や希望がぎゅっと詰まった、かなりのボリュームのコピーを手渡された。・・・そのときの私は、まさにカオスそのものを受け取った気分だった。それも生き生きと息づく力強いカオスである。(早川 1997: 58)

早川氏の言葉のように、けやきコミセンは「夢と希望がぎゅっと詰まった」コミセンだったので。

そして、今、けやきは 20 周年となり、新たな曲がり角を迎えようとしています。「夢と希望」がコミセン内で熟成し、そこで生まれたつながりをどういう風に生かしていくか、けやきでは現在、そんなことについて議論を重ねています。



1989 年 12 月 16 日

落成式時の記念写真 (『まちをつくる』より)



イベントで盛り上がるけやきコミセン

「けやき」がこのまちの中で、どのような立場になるべきなのか、「けやき」がけやきを飛び出して、このまちを本当により良くしていくということが重要なのではないかと考えています。

「けやき」がよりパワーアップし、さらにこのまちがより良いまちになっていくためには、地域の皆さんのお力添えが必要不可欠です。今年は 20 周年関係でイベントもあると思いますので、是非とも「けやき」に足を運んでください！ (K)

けやきコミセン物語（1）

けやきコミセンには、毎年たくさんの見学者が訪れます。また学生たちや子どもたちの活動への参加も多く、幅広い世代間交流や「地域を発見」する場にもなっています。「ユニークなコミセン」をつくらうと願ってきたけやきコミセンですが、そのユニークさは建物だけでなく、管理・運営・活動の全般に現れて、今のところの評判はよいようです。今年にけやきコミュニティセンター開館20周年、「けやき」の「ユニークさ」「けやきらしさ」について、その源を追ってみましょう。



建設までの時期（それはクリーンセンター建設用地選定から始まった）

———開放的で誰でもが気軽に使えるコミセンがほしい！———

「クリーンセンター（ごみ焼却場）用地を、吉祥寺北町の市営プール地に選定する」・・・1978年12月22日の市議会本会議で当時の市長報告がなされ、翌日の新聞紙上で私たちは「一夜明けたら地元住民に」になっていたのです。当初反応はさまざまでしたが、プール地周辺の5丁目を中心にしたこの地域でまとまっていったのが「用地選定を市民参加でやり直せ」という意見に集約された大きな運動になりました。

市議会・行政に働きかけ、地域にはニュースでお知らせし、昼に夜に相談したり、全市に車で運んではチラシを配って歩いたり・・・人のつながりや、運動の原型はこの時期に作られました。結果として運動は全市の世論を変えて、クリーンセンター建設特別委員会が設置され、その提言を受けて行政が、用地選定をしないしました。ごみの焼却施設のような、一般的には歓迎されない施設の用地選定に、選ばれた四候補地の住民が参加する委員会が、提言をまとめられるはずがない・・・というそのころの常識を超えて、委員会がまとめた提言を受けた市長が用地選定をしないしました。住民の理にかなった運動が、行政決定を覆したのです。こういう数年の経過の中で、まちの雰囲気が変わりました。

- ①この運動を通じて、たくさんの新しい人間関係ができていきました。
- ②多くの人が「自分のまち」を意識するようになり、この地域のことを知っていきました。
- ③「参加」し「行動」すれば「不可能に思えたことも変えられる」という運動の体験を共有しました。
- ④たくさんの方が、「ごみ問題」を知り勉強して「ごみ問題」に目覚めていきました。

（この地域の集団回収は活動資金を得るためにはじめて、今でも取り組みは市内随一です。）

会合は個人のお宅や、都営住宅の集会所、四中のPTA室などを借りていましたが、「この地域にも気軽に集まれるコミセンがほしい」・・・となり、1982年5月に中央北コミュニティ準備会が発足しました。

「今までのようなコミセンならいい」「税金の無駄遣いだ」・・・どんなコミセンを望みますか？のアンケートにこんな返事が返ってきました。ならば「ユニークな」「こんななら税金も無駄ではない」コミセンをつくらうと話し合い、「ユニークなコミセンの、ユニークってなあに？」とニュースでたずねたりしました。これが始まりでしたが、開設までに7年もかかるなどとはそのころは露思いませんでした。（Y. A）

けやきコミセン物語 (2)

けやき開館 20 周年を記念して「地域防災」をテーマに地域をつなごうと、プロジェクトチームが動き出しています。ナイトワークも定期的に続けられています。「災害に強い安心・安全のまち」を目指し住民の支えあいとの関係づくりが進められています。さて、今回はけやき開設までの時期を「ユニーク」と言う切り口から物語りましょう。

ユニークなコミセンを建てよう (よく語り、よく学んだ)



前号で述べたように、「クリーンセンター用地選定を市民参加でやり直そう」を掲げて地域ぐるみの運動を成功させ周辺の「まちづくり市民委員会」まで発展させたこの地域の「私たち住民」は、当時武蔵野市コミュニティ構想に述べられた「市民参加」の申し子であったかもしれません。

運動の中で知り合い、認め合っていてできていった人間関係、新旧・年齢・男女の別なく、自由で闊達な語り合いや、あらゆる可能性を探ったこの活動の様はコミュニティ構想(1971)で述べる「市民が市政に積極的に参加し、行政と共に武蔵野をつくりあげていく」姿であり、まさに「市民参加」そのものでした。

この地域にも「自由に使えるコミセン」がほしいと、話し込みが始まりました。「今までのようなコミセンならいらない。税金の無駄遣い」と言う地域の声には「ユニークなコミセンを」と、「ユニーク」の中身や「この地域に似合う」コミセンのイメージや具体的中身を模索して語り合いました。

けやきコミセン建設運動(1982～)は「コミュニティ構想」という難解な文章をよむことからはじまりましたが、当時は「コミュニティ」と言う言葉そのものが一般にはわけのわからないものでした。わからないままに私たちは「コミュニティ」に取り組み、日々の活動によって「これがコミュニティ」と感じてきたのかもしれません。

コミセンの建設用地が決まる前からまちの中にある程度広い人間関係があり、みんなで「コミュニティとは何ぞや」と言う勉強から始めました。当時の長期計画にもコミュニティの予想地区としてこの地域が図示されており、他の条件も申し分なく満たして手を挙げたので、すぐ実現するかと思っておりました。が、結果として完成までに異例の 7 年間がかかり、17 館中の 16 館目としての開館になりました。充分長い準備期間の間、けやきコミュニティ協議会を発足(84 年 11 月)、「けやき」と言う名もすんなり決まりました。他のコミセンが西だの北だの町の名前をつけているのに、これもユニークです。あちこちのコミセン・図書館・美術館など見学・研修に行ったり、ニュースで広くお知らせし、まちの中の意見もよく聞きました。あきれるほどよく話し合いましたし、活動資金の調達も、焼きだんごを売るなど、都営住宅の集会所や公園をお借りしました。

「土地がない」と言われ、地域の連携の力で土地(現さわやか公園、扶桑どおり公園内に差し替え)を見つけたり、住民側の設計者をたて永年の夢を形にしたり、行政とは緊張関係のなかで十数回も設計案の図面をやりとりし、「これでまとまらなければ延期」と報告された会議の中で全員が「ダメ」を出すというような経過を含めて、ついに合意しました。永年の話し合いの中身や活動の実態を反映して会則が作られました。

振り返ってみると、一番ユニークなのは関わった「人の集団」だったかもしれません。(Y. A)

けやきコミセン物語 (3)

「けやきのイベントは面白い」・・・子どもの間に、いつの間にかそんな噂がたっていると聞こえてきたのは、10 年も前のことでしょうか？ まち全体を舞台にした「おもしろ発見会議」「忍者修行道場」など「まちに出よう」「いいまち創ろう」と通年事業を繰り返した数年でした。そういう活動が発展して、同時にたくさんのチームによるより日常的な動きになりました。「まちづくり局」(03 年)の誕生です。

いまだ発展途上です・・・あなたも参加を



はじめの頃は「来てね、手伝ってね!」と、運営委員全体が主催者の顔になって、年間の行事や企画にお誘いの声かけをしたものでした。イベントの手伝いから運営委員にと誘われた人も多いんですよ。

「けやきってなんでもやっちゃうんですね!」・・・「扶桑通りの成蹊のコンクリート塀に壁画を描こう!」という一言が、形を変えて市営プール前の広場で巨大な絵になって掲げられたり・・・誰かがなにげなく発言した一言からだんだんその熱気がひろがり、実現してしまう。新顔や若い人を実行委員長に立てて、ベテランが周りを固める・・・というようなことが、今に引き継がれています。

けやきコミュニティセンターの年間利用者は約 6 万人、運営委員 30~60 人、今ではいろいろな形や場所です。けやきを支えてくれる協力員が 100 名を超えています。”けやきまつりなど大きなイベントになるとスタッフの数は 200 人ほどにふくれます。日頃けやきを利用している若者をはじめ、子どもたちも当日参加するだけから、当日の仕事の担い手となり、計画段階からの参加も見られるようになりました。

うれしいことに、年間の大きな行事には、北町 5 丁目町会の餅つきをはじめ、大野田福祉の会・クリーンむさしのを推進する会北町支部・緑町コミセンをはじめ地域の諸団体との連携もすすんでいます。日常的にはまちづくり局 13 チーム(09 年 10 月現在)、約 200 名の活動によって、性別・年齢を問わず多彩なたくさんの人たちの参加があり、世代間の交流の域を超えて世代間共同にすすみつつあり、「若い人がたくさんいてうらやましい」と言われるけやきになっています。

どんな人が、どのように使うだろうかと、まちの人々の様子を思いながら、何度も話し合い練られた建物(基本設計・早川洋氏)は、「あったかくて居心地が良い」「ふらっと寄りたくなる」「そこで友だちができる」ようにと願ってそれを形にしたものです。初期のコミセンではあまり大事にされなかった子どもや幼児連れの親子、なかなか来られないだろうサラリーマンのお父さんや、群れるのが苦手な人たちに来てもらうための工夫など・・・話し合ったことは、全部実現したわけではないけれど、今に生きているのを感じます。大勢の人が力を合わせれば、まちは良くなる!・・・私たちは活動しながらそのことを実感してきました。

あなたも来年は、コミュニティ活動に参加するけやきの運営委員になりませんか？ (Y. A)

けやきコミセン物語 (4)

「自由に使えるコミュニティセンターがほしい」と準備会が発足したのが1982年。以来7年間の知恵と力を尽くした大勢の協力が実って、「けやきコミセン」ができて20年たちました。80年代のこの地域は、人通りの少ない静かな町でした。この20年間でまちの中の人の流れが変わりました。人通りが多くなり、北にも南にも行きかう人がたくさんいます。まちの中で挨拶や立ち話が増えました。たくさんの大小のグループが活発に活動し、子供から高齢者まで世代や性別を超えたお付き合いが生まれています。



けやきコミュニティセンターは毎朝9時半から、夜9時半までが開館時間です。管理運営は近隣住民の自主参加に任されています。事務室では二人のお当番が1日3交替で時間内の館の受付業務・管理運営全般に責任を持ちます。この部分だけが有給で運営委員の約40人の人によって交替で担われ、ほかのすべての仕事は自発的な活動の参加です。運営委員は毎年3月に公募します。(現在公募中!)

学習室・子どもルーム・コミュニティルームの3部屋は事前の申し込みは要りません。どの部屋も明るく日当たりのよい快適空間です。受験期が近づくと2階の学習室に朝はやくから来館する若者たち、土日の子どもルームには幼児連れの若いお父さんや、孫を預けられた新米おじいちゃんなどの姿も見られます。

コミュニティルームは飲食自由でいつもテーブルに花が絶えません。ふらっと寄れる、お茶飲み、読書に、待ち合わせに、またちょっとした打ち合わせや、子どもたちのゲーム遊びにと、いつも幅広い年齢の人たちによる多様な利用でにぎわいます。

毎月第3土曜日の午後は、ご近所男性たちがチェックのエプロンで「けやき茶社」のマスターに変身、本格コーヒー(150円)や中国茶と手作りスイーツが好評で、もう5周年を迎えます。月曜日の昼時には、毎週けやきガーデナーズの作業後のお茶の時間。月2回の火曜夜8時ここから出発するナイトウォークは、分散しての町内見回りを兼ねて、帰りにまた寄って熱いお茶を飲みながらの情報交換とおしゃべり。大きなイベントのときは、ここが食堂になりおいしい匂いがたちこめます。あるときはミニコンサートの会場、また休館日(水曜日)には、研修会会場など、曜日により時間によって、地域のリビングルームとしていろいろな使い方をされます。

コミュニティセンターは、地域の人々が気軽に使える「場」としての機能と同時に、「まちづくり・コミュニティづくりの拠点」としての機能も期待されています。まちの中で、人と人との結びつきが増え、語り合いが増えると、お互いの信頼が生まれ、地域の情報も集まり課題も見えてきます。けやきの20年はよく遊び、よく話し合い、その結果まちの内外に人をつないで来ました。それは「えらい人をつくらない」という自覚と深く考え、学びつづけた年月でもありました。

誰でもが人に対してやさしくなれる、これがまちをつくる地域の力です。今、世の中は解決できない困難が山積する中、人の生活の場である地域から「大勢の人の絆」に支えられた「信頼」とか「やさしさ」を発信することが、私たちにできる未来への最大のおくりもの、コミュニティセンターのできる「まちづくり」ではないでしょうか。(Y.A.)